

大金重晴家文書

那珂川町(旧那須郡馬頭町小口)の大金重晴氏から古文書類が一括して栃木県立文書館に寄託されました。この文書は、すでに大金重徳家文書として、昭和五十八年度『栃木県史料所在目録第十三集(馬頭町ほか)』に目録が公刊され、栃木県史や馬頭町史などの編纂でも活用されています。

今回、史料所在目録を基に再点検し、合綴の文書は枝番を付して各冊毎に目録化しました。新目録は追加を含めて二五九四番まで、枝番号を含めた総点数は三千百点にも及んでいます。

大金家文書の特徴を紹介しましょう。大金家のある小口村は、近世水戸藩領武茂郷の一村であり、大金家文書は近世から近代に続く小口村の豊かな村方史料です。特筆される第一は近世前期の大金重貞しげさだによる著作類です。中でも「那須記全十五巻」は圧巻で、重貞の草

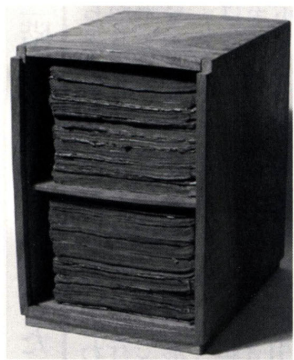


写真1 「那須記」の保存箱

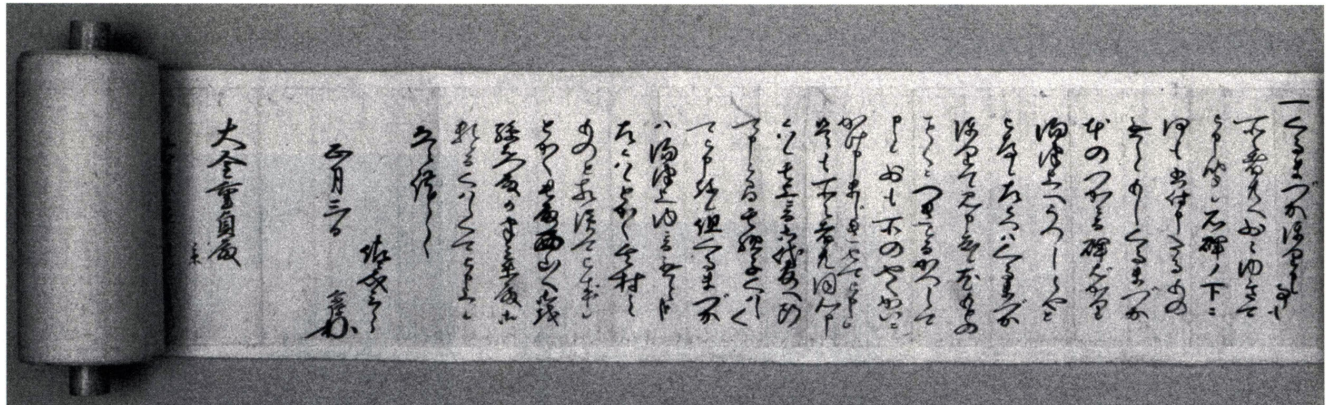


写真2 佐々介三郎より大金重貞宛書状から (No.1)

稿原本です。その全文は『栃木県史料編中世五』に収録され、『同通史編3中世』の解説と共に興味がそそられます。

那須記は重貞により巡村中の水戸藩主徳川光圀みつくにに献上されました。初めて那須国造碑の存在を知った光圀は、家臣の佐々介三郎ささすけさぶろうに命じて国造碑の調査と保存のための碑堂建立に乗りだします。また碑に記された国造の墳墓を求めて、付近の侍塚古墳さむらいづかを発掘します。

この間の事情は「佐々介三郎より大金重貞宛書状」に詳細に語られ、大金家でも特に大切に保存され今に伝えています。これらは『県史史料編古代』に収録され、『同通史編2古代』に解説されています。大金家文書には「湯津神村車塚御修理」等の直接発掘に係わる文書もありますが、斎藤忠・大和久

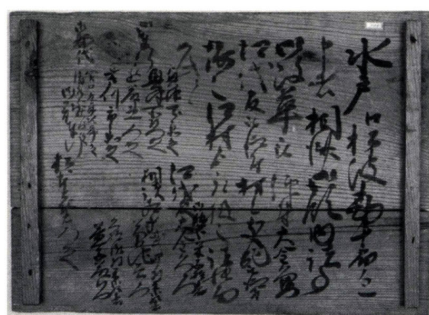


写真3 宝永改革書類入箱裏書 (No.846)

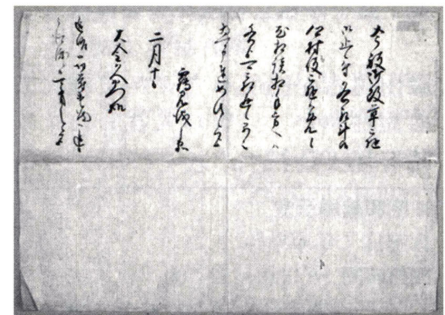


写真4 郡奉行より改革中止の達 (No.594)

震平『那須国造碑・侍塚古墳の研究』は関連文書と共に検討されています。

大金家文書で次に注目されるのが水戸藩の宝永改革関係の史料です。華やかな元禄文化の言葉とは裏腹に、当時の社会不安は深刻な状況を呈し、飢饉、大地震に続き富士山大噴火が襲います。水戸藩領も深刻さは変わらず、「宝永の改革」と称する財政改革に迫られます。松波勘十郎まつなみが新たに登用され、村々の有力者が郷代官に任命されて改革が進行します。武茂郷では大金久左衛門が郷代官に任命され改革のまっただ中に置かれます。宝永六年一月、改革反対の水戸全領大百姓一揆のなかで、松波は追放されて改革は終りを遂げました。大金家文書は改革から失敗に至る状況を雄弁に語る又とない史料となっています。

(奥田謙一)